

# 大君と薫の疑似後朝

——宇治の暁に注目して——

吉海直人

## 一、総角巻の疑似後朝

最近、「垣間見」論の一環として、視覚とは別に聴覚や嗅覚の重要性を指摘してきた<sup>①</sup>。その中で、暁における後朝の別れ場面にも、それが有効であることがわかってきた<sup>②</sup>。そこで今回は宇治十帖の中で、総角巻における薫と大君の疑似後朝の場面を粗上にのぼせ、あらためて聴覚に注目して再検討してみることにはしたい。

問題の箇所は、次のように描写されている。

はかなく明け方になりけり。御供の人々起きて声づくり、馬どもものいばゆる音も、旅の宿のあるやうなど人の語る思しやられて、をかしく思さる。光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のはれなるをもろともに見たまふ。女もすこしぬざり出でたまへるに、ほどもなき軒の近さなれば、しのぶの露もやうやう光見えもてゆく。かたみに、いと艶なる容貌どもを、「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば、やうやう恐ろしさも慰みて、「かういとはしたなからで、物隔ててなど聞こえは、まことにこのころの隔てはさらにあるまじくなむ」と答へたまふ。

明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。夜深き朝

の鐘の音かすかに響く。「今だに。いと見苦しきを」と、いとわりなく恥づかしげに思したり。「事あり顔に朝露もえ分けはべるまじ。また、人はいかが押しはかりきこゆべき」

(新編全集総角巻238頁)

これは八の宮の一周忌が近づいた八月下旬、薫が大君の居所に押し入って、一夜を共に明かす場面である(ここに中の君は不在)。「はかなく明け方になりけり」とは、単に時間の経過を示すだけでなく、薫と大君との実事なき後朝を婉曲に表出したものである。

ところで普通「明け方」あるいは「暁」というと、すでに夜が白み始めた頃、つまりあたりが次第に明るくなる夜明け方の時間帯を想像するのではないだろうか。それは必然的に男女の別れを象徴する。しかし平安時代の後朝の別れは必ずしも明るくなる夜明け方だけでなく、それよりずっと早い真つ暗な時間も含まれていた。

というよりも、男女の別れに決まった時刻があるのではないようだ。いわゆる「後朝の別れ」「暁の別れ」とは、日付が翌日になる午前三時から夜明けまでの比較的長い時間帯の中で行われるものだからである。そのため男が早く帰るのは、愛情の薄さとも受け取られた。夜明けという解釈でも決して間違いではないが、もっと暗い時間でも可能であること認識していただきたい。という以上に、真つ暗な時間帯の方がむしろ重要だからである。

この「明け方」という表現にしても、普通には夜明け頃、つまり明るくなる頃と思われていないだろうか。しかしここは視覚的に明るくなつたのではなく、まだ真つ暗な時でも可能なのである。特に「明け方」とある場合、それは視覚ではなく明日になつた、つまり日付が変わつた（丑の刻から寅の刻になつた）意味であることが多いので、これも暁（午前三時）になつたばかりと解すべきである。この時点が男女の間では非常に大きな境界なのである。

ではその時刻になつたことを、薫はどうして知りえたのだろうか（時計はない）。本文では薫の供人が「声づくり」を行っていることが記されている。これは単なる従者の独り言が聞こえたというのではなく、明らかに室内にいる薫に対して外の従者達が日付が変わつたこと、すなわち帰京の時刻になつたことを「声づくり」して告げていると読みたい。それに連動して、「馬どものいばゆる音」つまり馬のいななきも聞こえてきた。<sup>③</sup>これは従者が馬の準備（帰り仕度）をしているからである。京と違つて宇治の八宮邸は狭いので、そういった音も聞こえるのだろう。

このような外部にいる従者の動きについて、新編全集の頭注一七では、新婚と信じて疑わない従者たちは、寝所の外から咳払いをして、主人の帰宅を促す。  
（同頁）

と説明している。内実を知らない周囲の者達には、後朝そのものと受け取られていたというわけである。この解釈で良さそうにも思えるが、ではその夜に薫が大君の寝所に侵入したことを、従者はどうやって知りえたのであろうか。あるいはそれ以前から、薫と大君は既に結ばれていたと誤解していたのかもしれない。このあたりがはっきりしないのだが、いずれにしても供人たちは、薫が帰宅するのにふさわしい時刻を自ら判断し、主人をうながしていることになる。この従者の咳払いによって、薫は聴覚的に別れの時を知つたのである（その従者がどうやって時刻を知つ

たかはわからない）。

## 二、暁の時間帯

前に引用した文章の少し後に、

「暁の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」と嘆きがちなり。鶏も、いづ方にかあらむ、ほのかに音なふに、京思ひ出でらる。  
（総角巻239頁）

とある。ここでは「暁の別れ」と表現することで、いかにも男女の後朝であるかのような演出がなされていた（「事あり顔」ともあつた）。たとえここが実体を伴わない疑似後朝であるにせよ、男が女のもとを去るにふさわしい暁の時間帯が、「鶏鳴」という聴覚的というか原始的な表現で設定（演出）されていることに間違いはあるまい。<sup>④</sup>従者の声づくりに同調するかのように、鶏も鳴いているのである（鶏鳴狗盗のパロディか）。鶏は庶民的にも思われるが、どうやら貴族の邸では普通に鶏を飼育していたようである。『枕草子』を見ると宮中にも鶏がいるし、なんと源氏の六条院でも鶏が鳴いていた。鶏は時計替わりになる有用な鳥だったのだ。

前に戻って本文を見てみると、そのすぐ後ろの方に「夜深き朝の鐘の音」と、やはり聴覚情報が記されていた。この「夜深き朝」というのは、表現として奇妙ではないだろうか。視覚的に見れば「朝」は明るいはずだから、それを「夜深き」で修飾するのはおかしいと思われるからである。これについても新編全集の頭注五に、

「朝の鐘」は、宇治山の阿闍梨の住む寺の鐘であろうか。晨朝（じんしやう）午前四時ごろ）を知らせる鐘。まだあたりは暗い。  
（同頁）

と注されていた。この時が八月（秋）の午前四時であるとすれば、当然まだ暗いはずである。それなら先の「明くなりゆき」との整合性も説明

すべきであろう。なお「晨朝」は卯の刻であるから、ここは初刻表示で午前五時頃としたところである。この時間になると、あたりは薄明るくなりはじめもおおしくない。

「夜深き」は幅があるので、夜明け直前でもいいのだが、もし「夜深き」を真つ暗な頃としたのであれば、「晨朝」より一つ前の「後夜」（午前三時）の鐘（いわゆる「暁の鐘」）の方が後朝にふさわしかろう。参考として『紫式部日記』の冒頭部分をあげておこう。

まだ夜ふかきほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子まいりなばや」「女官はいままでさぶらはじ」「蔵人まいれ」などいひしるふ程に、後夜の鉦うちおどろかして、五壇の御修法はじめつ。

（新大系253頁）

これによれば、「まだ夜ふかき」頃に「後夜の鉦」が鳴っているのであるから、「夜深し」が後夜の鐘と重なっている（対になっている）ことがわかる。とはいえ「朝」の鐘とあることで、どうしても視覚的に明るくなるように解釈したくなる。しかしこれは「あさ」ではなく「あした」（明日）であつて、日付が翌日になった意味にとれば問題あるまい。

ついでながら後の『浜松中納言物語』巻三には、

心深うあはれなる御ものがたりに、あかつきがたにもなりぬ。ごやのをこなひも、御堂に入り給ひて、姫君にも、中略と教へをい給。明けゆくまに、月いよいよすみまさりて、瀧のをとも松風の響も、取りあつめたる心ちするに、

（大系本323頁）

と出ている。時刻が「あかつきがた」（午前三時頃）になったことを受けて、「ごや（後夜）のをこなひ」を始めているのだから、これによって「暁方」と「後夜」が同一時間であることがわかる。ここに聴覚情報は記されていないものの、「後夜」の行いの時間を知らせるために、寺では「後夜の鐘」が鳴らされているはずだから、書かれていなくても聴覚的に「暁

方」になったことを知ったと読める。

その後「明けゆくまに」とあり、かなり時間が経過しているようにも見えない。本当の夜明けが近づいているので、時間的な齟齬は一切認められない。しかしその後にある「瀧のを」と「松風の響」は聴覚情報である。まして「月いよいよすみまさりて」とあるので、まだ夜明けにはなっていないと解すべきであろう。

### 三、榎本巻の解釈

これに類似した例として榎本巻の、

有明の月のいとほなやかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、そなたの薨上げさせて、見出だしたまへるに、鐘の声かすかに響きて、明けぬなりと聞こゆるほどに、人々来て、「この夜半ばかりになむ亡せたまひぬる」と泣く泣く申す。

（榎本巻188頁）

が参考になる。ここは八の宮の訃報を姫君たちが聞く場面である。八の宮は八月二十日ごろに亡くなっているので、有明の月は時宜を得たものであつた。ここにある「鐘の声」について、頭注一六には「宇治山の、夜明けを告げる寺鐘であろう」（同187頁）とコメントされている。しかしこれも視覚ではなく聴覚情報であり、それを聞いて「明けぬなり」と翌日になったことを知ったのだから、ここも視覚的に明るくなる夜明けではなく、寅の刻に鳴らす「後夜の鐘」（聴覚情報）の方がふさわしいのではないだろうか。

これについて小林賢章氏は、時間的経緯を考慮された上で、

夜半に死んだ父宮の訃報が朝方に伝えられたとしたら、いかにも不自然である。

（51頁）

と問題提起され、

眠ることなく、父宮の安否を心配していた姫宮が、父宮のおいでになる山寺の方を見ると、川面を月が照らし、折から鐘の音が聞こえた。その鐘の声は、寅の刻を告げる鐘であったのである。(52頁)

と、夜半に亡くなった八の宮の訃報は、午前三時頃に邸に届いたと解釈すべきことを主張しておられる。その方が距離と時間の関係もスムーズではないだろうか。

ただしこれで総角巻の問題がすべて解決したわけではない。少々やっかいな部分が残っている。実は先の本文に続いて、

光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のあはれなるをもろと  
もに見たまふ。女もすこしゐざり出でたまへるに、ほどもなき軒の  
近さなれば、しのぶの露もやうやう光見えもてゆく。

(総角巻237頁)

とある。「障子」の実態がよくわからないが、新編全集では「光見えつる方」を「夜明けの光の射してくる方角」と考え、続く「光見えもてゆく」を「忍ぶ草におく朝露の光もしだいに見えてくる」と現代語訳している。この部分だけ見ると、むしろ夜明け頃の方がびったりしているし、矛盾なく訳せるように思える。冒頭に「はかなく明け方になりけり」とあって、その後に「鐘の声」や「鶏鳴」が登場しているのだから、聴覚情報以前に「明け方」になったことが唐突に告げられていることになる。だからこそ視覚的な捉え方が優先されるのであろう。

そういった通説に対して小林氏は、

ここの「光」は、「こはづくり」した家来たちが持つ松明の光でなくてはならない。ここまで、この光を太陽と考えてきたのは、アケガタを日の出前後と漠然と捉えることが、その背景にあったことはま  
ちがない。(135頁)

と夜明け説を否定され、独自に「松明の光」説を主張しておられる。

ただし松明の光で、果たして「空のあはれなる」や「やうやう光見えもてゆく」が説明できるであろうか。また先に「明くなりゆき」とあつたが、これは「明く」(翌日になる)とは違って視覚的に「明るくなる」であろうから、これについての明解な説明も必要であろう。ここは前述した『浜松中納言物語』の「明けゆくままに」とも類似しているのではないだろうか。また大君が「今だに」と訴えて薫を早く帰らせようとしているのは、まだ暗いからである。それに対して薫は、「人はいかが推しはかりきこゆべき」と言い返している。これについて頭注九では「あまり早く引き揚げると、まずいことがあつたかと疑われる」と解している。これを素直に受け取れば、まだ帰るには早い時間ということになる。日付が変更してから、どれだけ時間が経過しているかが解釈の分かれ目になる。

これを踏まえた上で、私見としては薫の会話の中に「ただかやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び」(337頁)とあることを重視したい。「月」が話題になるということから、ちょうどその時有明の月が出ていた、薫は月を見ていたと解釈することはできないだろうか(八の宮の一周忌は八月二十日頃)。だからこそ「かやうに」なのである。

先に引用した椎本巻でも、有明の月が出ていたではないか。この仮説が許容されるのであれば、明るくなつたのは日の出(夜明け)によるのではなく、有明の月の光と解釈できる。有明の月は暗い空に出ており、夜明けまでにはまだ時間があることになる。というのも、その後には薫は、

山里のあはれ知らるる声々にとりあつめたる朝ぼらけかな

(239頁)

と詠じている。ここに至って薫は「暁の別れ」を「朝ぼらけ」と言い換えているので、ようやく「朝ぼらけ」の時刻、つまり少し空が白み始めた頃になったと時間の経過を読み取りたい。

## 四、月の記憶

先に有明の月が出ている可能性を述べたが、実は薫にも月の記憶があった。まず橋姫巻の垣間見場面があげられる。その折、薫が宇治へ出かけたのは「秋の末つ方」(135頁)であった。薫は京都を「有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出で」(同頁)ている。この折は馬に乗っているようだが、それにしてもかなり遅い時間に到着したはずである。宇治の姫君の合奏は、そんな遅い時間に行われていたのである。後に薫はその垣間見を「見し暁」(153頁)と回想しているので、暁の時間帯だったことが察せられる。

続いて薫が垣間見るシーンは、

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押し開けて見たまへば、  
月をかききほどに霧りわたれるをながめて、簾を短く捲き上げて  
人々ゐたり。簀子に、いと寒げに、身細く萎えはめる童一人、同じ  
さまなる大人などゐたり。(139頁)

とあり、薫は霧の晴れ間の淡い月の光によって、姫君を垣間見ていたのである。また大君が亡くなった後の冬の描写にも、

雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人のす  
さまじきことに言ふなる十二月の月夜の曇りなくさし出でたるを、  
簾を捲き上げて見たまへば、向かひの寺の鐘の聲、枕をそばだてて、  
今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、

おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば  
風のいとほげしければ、蔀おろさせたまふに、四方の山の鏡と見  
ゆる汀の氷、月影にいとおもしろし。京の家の限りなくと磨くも、  
えかうはあらぬはやとおぼゆ。わづかに生き出でてもものしたまはま  
しかば、もろともに聞こえましと思ひつづくるぞ、胸よりあまる心

大君と薫の疑似後朝

地する。

(総角巻332頁)

と師走の月が印象深く照っていた。

総角巻の「簾を捲き上げ」は、橋姫巻の「簾を短く捲き上げ」と共通している。これは白氏文集の引用という以上に、月を見るための所作と見てよからう。また「もろともに聞こえまし」は、疑似後朝場面の「空のあはれなるをもろともに見たまふ」と共通(引用)している。ただしこころは反実仮想となっており、もはや大君と一緒に月を見ることはできない。もともと「もろとも」は男の一体化願望の場合が多いのだが、疑似後朝場面でも、別れに際して大君と「もろとも」に空を眺めることで、薫は一体化幻想を味わっていたことになる。大君が「女」とか「女君」と呼称されているのも、薫の幻想の表出なのかもしれない。

ついにながら夕顔巻においても同様の描写があった。

端近き御座所なりければ、遣戸を引き開けて、もろともに見出だし  
たまふ。ほどなき庭に、されてある呉竹、前栽の露はなほかかる所  
も同じごときらめきたり。(夕顔巻156頁)

これは源氏と夕顔の後朝の別れ場面であるが、やはり源氏は夕顔を誘ってもろともに外を眺めている。ここにも月は描かれていないが、その直後に「いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ」(159頁)とあるので、やはり十五夜の月は出ていたのである。

## 五、従者達の苦勞

ところで、薫のような貴人が「夜深く」帰るとなると、お供の者たちの動向もそれに連動することになる。特に主人の私的な夜の忍び歩きともなると、お供の者たちは大変な苦勞を伴うはずである。まして行く先が京都から離れた宇治であれば、往復の疲勞も相当なものであろう。し

かも主人が愛人と過ごしている間、従者達は時間が経過するのを待つていなければならなかった（もちろんそれなりに接待はされているであろうが）。

源氏が絶大な信頼をおいている惟光など、その待ち時間を私用にあてたことがある。生憎その時に夕顔が六条某院で急死するのだが、「夜半、暁といはず御心に従へる者」である惟光が、「今宵（今夜）しもさぶらはで」（夕顔巻170頁）という大失態をしかしてしまった。惟光はいつものように「暁に御迎へに参る」（同165頁）つもりだったのだろうが、その不在の間に夕顔急死事件が勃発してしまったのである。また事情は異なるが、源氏が空蟬の女房中将の君に、「暁に御迎へにもせよ」（帚木巻100頁）と告げたのも、暁が一般的な男女の別離の時間だからと考えばすつきりする。命じられた中将の君は、ちゃんと暁に迎えに来ている。

繰り返すが、暁は寅の刻（午前三時）から夜明けまでの幅のある時間帯を指す言葉である。その範疇ならいつでも暁であった。「あけほの・朝ほらけ・しのめ」も暁に含まれる。では従者達は暁の時間帯の中で、自由に迎えの時間を選択できたのであろうか。どうもそうではないらしい。「暁方」というのは暁になり立てのことをいうようだが、いわゆる「暁の迎え」というのも、暁になったらすぐという意味合いのようである。

だからこそ帚木巻における源氏の従者たちも、

鶏も鳴きぬ。人々起き出でて、「いとぎたなかりける夜かな」、「御車引き出でよ」など言ふなり。守も出でて来て、女など、「御方違へこそ。夜深く急がせたまふべきかな」など言ふもあり。

（帚木巻103頁）

と、暁を告げる「鶏鳴」を合図に、すぐに出立の準備に取りかかっている。「いとぎたなかりける夜かな」、「御車引き出でよ」というのも、総

角巻と同様に内にいる源氏に聞こえるようにしゃべっているのである。この場合、暁の到来は「鶏も鳴きぬ」という聴覚情報であった。それに対して紀伊守や女房たちは、これは後朝ではなく方違えなのだから、何もそう「夜深く」急いで帰らなくてもと言って引き留めている。これによって逆に普通の後朝であれば、やはり鶏鳴というのが男の帰る時間の目安になっていることがわかる。もちろん方違えにしても、日付が変われば無効になるので、やはり暁が帰ってもいい時間であることに変わりはあるまい。

## 結

以上、総角巻における印象的かつ特殊な薫と大君の疑似後朝を検討してきた。その結果、疑似であろうと本当であろうと、暁というのは男が女の元を去る時間帯であることが確認された。しかしながらその時刻の始まりは、夜明けよりもずっと早い午前三時であるから、あたりは真っ暗であり、それを視覚的に知ることは不可能であった。

宇治という郊外においては、寺の修行のために鳴らされる「後夜の鐘」が、「暁の鐘」として機能していたようである。それは当事者である男女のみならず、従者たちにも帰り仕度を始めさせる役割を担っており、むしろ従者たちに帰りをせかされるような成り行きで、男女の後朝の別れが展開していた。宇治十帖に限らず、『源氏物語』における暁の時間帯は、後朝の別れを考える上で非常に重要な役割を果たしていると言える。特に聴覚による時刻の認知には十分留意すべきであろう。

ただし薫は大君と別れた後、別室（西廂）で横になって休息しており、すぐに帰京したわけではなかった。結局、帰京を急かした従者たちは、長時間ずっと待たされたことになる。一方の大君は、その後中の君のと

ころに戻って臥している。これまでまったく言及されなかった薫の香りがここで浮上する。大君の身体には「ところせき御移り香の紛るべくもあらずくゆりかか」(241頁)っているからである。さすがの中の君も、それによって姉が薫に抱かれたと誤認している。薫の移り香は擬似後朝を本当らしく見せるのに効果的であった。

## 注

- ① 吉海直人『垣間見』る源氏物語』(笠間書院) 平成20年7月
- ② 吉海直人『源氏物語』「夜深し」考―後朝の時間帯として―』古代文学研究第二次19・平成22年10月
- ③ 小町谷照彦氏「風景の解説―「総角」の表現構造―」『源氏物語の歌ことば表現』(東京大学出版会) 昭和59年8月参照。小町谷氏は馬の鳴き声に關して、「馬の嘶きは宇治の山里の光景としては似つかわしくても、後朝の情緒にはふさわしくないのである。「駒」は恋の通い路の案内とはなつたが、鳴き声は詠歌の対象とはならなかった」と述べておられる。
- ④ 三田村雅子氏「宇治十帖の〈音〉―雑音(ノイズ)として―」『源氏物語感覚の論理』(有精堂) 平成8年3月参照。なお三田村氏は、「この場面に限って言えば、薫の音の聞き方は、既に夕霧巻で戯画化されてしまった夕霧のそれと等しく」云々と、夕霧物語との類型を指摘しておられる。なお薫は鶏鳴を耳にして京のことを思い出しているが、それは鶏鳴が京に相應しい音だったことの証拠にもなる。
- ⑤ 平安時代の時刻は定時法(漏刻)であったが、その後の不定時法導入によつて誤解・混乱が生じ、平安時代も不定時法だったという意見まで出されている。さらに定時法と不定時法が同時に行われていたとする意見もある。確かに宮廷とそれ以外、あるいは貴族と庶民で時刻が共有できたのかどうかかわらない。仮に不定時法が通行していたとして、では夜の時刻をどのようにして知りえたのか、納得できる説明はなされていない。例えば暗い時間帯である寅の刻(午前三時)を、当時の人はどのようにして知り

えたのだろうか。それは定時法か不定時法かとは無関係ではないだろうか。だからこそ「鐘の音」・「鳥の声」が重要なのである。当時の鶏は採卵・採肉用ではなく、時刻を知るための鶏鳴用だった。しかしながらどこまで正確に鳴かせることができたのかは疑問である。もちろん物語でそこまでの現実味は不要であろう。

- ⑥ 小林賢章氏「アケ考」『アカツキの研究』(和泉書院) 平成15年2月。なお日付変更時点に關しては、小林論に依拠していることをお断りしておく。

⑦ 小林賢章氏「アケカタ考」『アカツキの研究』(和泉書院) 平成15年2月。なお「光見えつる障子」とあるが、普通「障子」は母家と廂の間の建具とされている。そこから簀の子を通して外を見るところというのは無理がある。この時間なら格子(蔀)も閉まっているはずだからである。また「押し開け」とあるが、どのように障子を開閉できたのかよくわからない。二人が廂にいて「格子」を開けるのならすつきりするが、昨夜薫は大君のいる母屋に侵入しているようなので、うまく説明できない。少なくともここは寝殿造りの建物ではないようである。

⑧ これに關連して伊藤夏穂氏「朝ぼらけ」詠―音を聞く時―』國學院大學大学院文学研究科論集37・平成22年3月では、「朝ぼらけ」の音は恋情を喚起し、「あかつき」の音は仏教的救済への希久を促す点で、両者の時間的観念は異なる」と述べておられる。

⑨ 吉海直人『源氏物語』橋姫巻の垣間見を読む』同志社女子大学日本語日本文学21・平成21年6月

⑩ 安永美保氏『源氏物語』「もろともに」考―紫の上への一対願望を中心に―』同志社女子大学日本語日本文学22・平成22年6月。なお蔀を下ろしたら景色は見えないはずである。椎本巻では蔀を上げて見ている。ここは蔀を下ろすまでのわずかな時間の景色であろうか。

⑪ 吉海直人『源氏物語』夕顔巻の「暁」―聴覚の多用―』國學院雑誌111―4・平成22年4月

(同志社女子大学表象文化学部教授)